- 1. 12 章ゲットーの記述は、とても現実にあったとは考えたくもない、非人道的なものばかりでした。上下水道もなく、電気も通っていない、狭小な空間に強制的に連れていかれたことは勿論ですが、中でもユダヤ人評議会を組織し、ナチスの命令を正確に実行する責任をユダヤ人に負わせたことは、特に卑劣なことだと思いました。11 章:強制移に関しては、戦時経済の厳しさにつけこんで、ヨーロッパ諸国からユダヤ人を強制移送させるというやり方に恐ろしさを感じた。ヒトラーが民衆の支持を得たのも、ドイツ経済が不況で、失業が相次いでいる原因を示した1ことだったと思いますが、人の心理の掴み方に恐ろしさを感じました。
- 2. 変な感想になりますが、何のために、2私はホロコーストについて学んでいるかわからなくなってきました。アイヒマンやヒトラーなどナチの政策の主導者について一人ひとり見ていくだけでも膨大な量の情報があり、裁判や仏、ブルガリアへの影響など、どんどん全体的な情報量は増えても、いまいち自分のこととして考えることができないもどかしさを感じます。だからこそ、期末論文ではかなり焦点を絞って3、この部分は理解できた、腑に落ちたというようにしたいです。
- 3. テキスト p。182 に「ヨーロッパ『新秩序』を実現しようとした」という所がありますが、ナチスは戦後について具体的な構想を持っていたのでしょうか。「アーリア人の国家建設」より細かく構想があったのか、気になりました4。

<sup>1</sup> 諸外国やユダヤ人に「責任を帰す」というやり方。1929年10月からの世界経済恐慌の原因をどこに求めるか、この際に、民族主義的・人種主義的な反ユダヤ主義の見方が活用されたということですね。

<sup>2</sup> ナショナリズム (民族主義・国民主義) の極端な発現の仕方を見据えることによって、過去と現在を深く理解し、未来を作り出していく現代人としての教養を磨き上げていく、というのが、講義の目指すところです。期末論文を書くためには、無限の対象とアプローチの仕方があり得る問題ですので、何を明らかにしたいか、問題の設定・問題の対象の絞り込みが必要となりますね。

<sup>3 「</sup>この問題がずっと疑問としてあった」、「この点の理解がほかの人とは違っていた」といった問題点を発掘し、「この問題を解きたい」という対象が絞り込まれて来れば、筋道ができあがってくるのではないでしょうか。「問題の発見は、解決の発見である」ともいわれます。適切な問題の設定をそれを解きほぐす論文とは、密接に関係しています。

<sup>4</sup> 期末論文のいいテーマとなります。この問題も、実は論争問題です。私の『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941-1942』(同文舘、1994年)では、ソ連を占領し征服した時にどのような構想を持っていたかを書いています。ヒトラーは、イギリスやフランスのように広大な植民地・勢力圏を獲得しようとしたことは明確ですが、それでは、海外植民地を手に入れる構想があったのかどうか、も論争問題です。テキストのなかに、「東部全体計画」、ないし「東部総合計画」(Generalplan Ost)というプランがあったことが示されています。この具体的な内容は、ドイツ語ではいろいろ研究があります。試みに、私も翻訳者の一人である『ホロコースト大辞典』、ゲッツ・アリーの「民族の耕地整理」構想を強調する研究書『最終解決』(法政大学出版局)、同じアリーの『ヒトラーの国民国家一強奪・人種戦争・国民的社会主義』(岩波書店、2012年)などを手始めに、調べてみるのも非常に有益化と思います。

- 4. ホロコーストをもたらしたのは、ヒトラーの命令を確実に実行することを重要と考え、 思考停止的に虐殺を行ったナチスの官僚体制にあるのではないかと思ったが、先生がお っしゃったように、強力な権力を持っていたナチス幹部の時のアイヒマンと、戦後裁判 にかけられ、一個人として追及を受けるアイヒマンが、同じ主張をするとは限らず、ア イヒマン裁判だけを見て、結論を出していけないと思いました。ニュルンベルク裁判や アウシュヴィッツ裁判についても、調べてみたい5と思います。
- 5. 授業内でも先生がおっしゃっていたように、「ドイツ外から移送されたユダヤ人」に焦点6を当ててテーマにするのも大変興味深いと思いました。今のところ、テーマ案が三つほどあって、大変迷っています。来週までにはテーマを決めてある程度方向性を決めていきたいと思います。本日の授業のように、今までのナチス、ユダヤ人迫害においての国外の状況や機能等を学ぶことのできる機会はなく、大変貴重で、この講義を受けることによって、自国の愛国心(特に自国が"世界で一番である"というナショナリズム的考え)によって他国を押さえつけたり、一つの人種を撲滅させようとする"負のナショナリズム "を理解することができているように思います。また、質問 Time や先週の感想とコメントを読んで、"裁判"にも大変興味を持ちました。皆が責任逃れをしていたが、どのような証言があり、どう処罰されたのか7・・・・。
- 6. ユダヤの強制移住についても、どのユダヤ人を優先させるかということについて、さまざまな事情が絡みこんでいるのだということが分かった。フランスやブルガリアでは、混血について考慮されたり、その<u>あいまいさのなかで如何に選別されたのだろう</u>8と思った。また、フランスが反発していたということについて、一瞬ナチスに抵抗しようとしたのかと思ったが、ナチスの命令の範囲内で意見を出しただけということで理解した9。
- 7. ○○のユダヤ人を、○○の国の人ととるかユダヤ人ととるかという話は、今の日本でも

<sup>5</sup> 期末論文のいいテーマの一つであり、「ニュルンベルク裁判」のキーワード検索で、豊富な文献が出てきますので、調べてみてください。

<sup>6</sup> ドイツに支配されたヨーロッパ諸国で、ユダヤ人がどのように処遇されたのか、この違い を検討してみることは、各国各地域における民族主義の在り方。ナショナリズムの在り方 を考える上で、重要な諸要素が出てくる可能性がありますね。

<sup>7</sup> いい問題の絞り込みです。ニュルンベルク裁判に関しては、『ニュルンベルク・インタヴュー』のような被告への直接のインタヴューの結果をまとめた本の翻訳もあり、いい「答え」が見付かるでしょう。

<sup>8 「</sup>移送に選別されるかどうか」は、一人一人の生命・運命にかかり、もしこの点に関心があるのであれば、「フランス、ブルガリア、その他の国別のユダヤ人の選別基準がどのようになっていたのか」、「各国別囲剿ユダヤ人の選別方法は?」といった問題設定の下で、調べてみるのも、いい期末論文のテーマとなる。

<sup>9</sup> フランスの対独協力政府ヴィシー政権の場合、イタリアのムッソリーニ政権の場合、ナチス・ドイツ側は、ユダヤ人の「移送」という課題と現地政府(対独協力の政府・同盟相手の政府との関係を良好に保つという課題との間で、また、ドイツのおかれた戦局によっても、違った対応をとっていた。この問題も、期末論文のテーマに設定し、調べてみる価値のあるテーマである。

レッテルを張るという形でもあるが、そのどちらにも所属していると捉えられず、どちら、と<u>決められなければならなかった時代は、不幸10</u>だと思う。P.145 のわずかな衣類と日常生活物資しか持ち出されなかったとあったが、逆に、<u>着のみ着のままで連れ出さ</u>れたわけではない<sup>11</sup>ことは驚きであった。

- 8. <u>ユダヤ人絶滅政策12</u>は、<u>ヨーロッパ中の国13を</u>巻き込んで行われ、ユダヤ人の移送を<u>そ</u>れぞれの国が実行14してしまったというところに違和感を抱いた。
- 9. 強制移住されるユダヤたちが生き残るためには協力者が不可欠で、そして、その動機は

10 ナチス・ドイツ国家は、その「どちらか」を決めて、移送するユダヤ人を選別した、ということですね。その「どちらか」を決めるときに、両親・祖父がキリスト教徒だったのかユダヤ教徒だったのか、が問題になったということが、ニュルンベルク法の選別基準、そして、ヴァンゼー会議の選別の議論・議事録で分かります。

反ユダヤ主義の選別基準・思想基準を持っていた勢力(ナチ党・親衛隊を率いるヒトラー・ヒムラーその他サイコ言う幹部たち)による行為です。「不幸な時代」といっても、ナチスが支配していない国や地域では、このようなユダヤ人差別の政策と法律はありませんでした。したがって、「時代」だけではなく、どんな勢力がその国・地域を支配していたかが問題になります。

11 「わずかな衣類とン地上生活物資」だけ、というのは、内容的には「着の身着のまま」ということではないでしょうか?「着のみ着のまま」を、その場で身に着けていた衣類だけ、という狭い意味に解釈しているようですが・・・「ごく最低限の衣類と最低限の生活物資だけ」というのが、「着のみ着のまま」の内容だと思います。それは別として、「移住」を名目にして、連れ出しているわけで、「移住」に最低限必要なものは許可した、というのは、そのことによって、絶滅収容所につれていくのではなく、「移住」ですよ、とユダヤ人を信用させる(だます)、移住だとの希望を持たせる、そのことにより、連行中・移動中はおとなしくさせる、抵抗させない、という効果・ないし作用があったことも、見ておく必要があるでしょう。

12 「絶滅政策」だったということを本当の意味で知っていたのは、ヒトラー・ヒムラー・ハイドリヒ・アイヒマンなどであり、多くの人は、「移住だ」、「厄介者を東方に疎開させた」と思い込んでいたという側面があります。まさに、そうした「移住だ」ということを信じ込ませるためには、絶滅収容所送りだという本当のことを隠す必要があったわけで、真の意味を確実に知っていたのは、少数だった、ということも考えてみる必要があります。千時間における「秘密」の意味合いの重要性を考える必要があります。さらに、平和だと思っている現在の日本でも、「特定秘密保護法」が制定され、重要な情報の秘密化がすすんでいることも、注意しておく必要があります。

13 <u>ナチス・ドイツが占領・支配した国々</u>、ナチスの圧倒的な力で<u>対独協力</u>をしなければならなかった、<u>対独協力をした国々とその支配者たち</u>、ですね。それ以外のヨーロッパの諸国は、中立であるか、ナチス・ドイツと戦っているわけで、むしろ、それら中立とナチスに対する敵対諸国は、ユダヤ人の亡命を受け入れたり、ユダヤ人と協力してナチス打倒のために戦っているわけです。

14 対独協力、ナチスドイツの政策に協力した、ということですね。しかもその場合に、「ユダヤ人を移送する、ユダヤ人を目の前から排除する」ことに、現地の人々(ナチス・ドイツのユダヤ人狩り・ユダヤ人追放に協力し、あるいはそれを求めた人々)の利害もかかわっていたこと、これも、直視しておく必要があります。「ユダヤ人を排除する」ことで、どのような利益が得られたのか、ということも、住宅であったり、商売であったり、その他さまざまの「利益」があったことが、テキストで紹介されています。

様々であったという一文があったが、おそらくシンドラーや杉原千畝などの人<sup>15</sup>が例として挙げられるだろう。ナチスの支配に対して抵抗した軍将校や、一般の人、大学生(ゾフィー・ショル、ハンス・ショル)による<sup>16</sup>ヒトラー暗殺計画などもあった。しかし、ナチスの支配に対して、これらおかしいと感じることができたのはわずかで、ほとんどの人はナチスという大きな組織・権力に従ってしまった。人々の無関心、長いものに巻かれる、保守などの行動に対する原因は、さまざまにあると思うが、自分がもしそういった状況下に陥っても、正しい判断が、自主的にできるようでありたいと感じた<sup>17</sup>。

10. ブルガリアの場合に関して。以前、「SHOAH」という映画を見た時に占領したギリシャのユダヤ社会と当時の様子について語る場面もありました。東欧やドイツから遠いギリシャにも少数のユダヤ人がおり、少数社会であるからこそ、当時の強制移送のための迫害は小戸おいいていた印象がありました。ユダヤ人迫害に関してあまり多く語られない地域に関しても、目を向ける必要があるのではないか18と思いました。あと、**言語や教育がナショナリズムに深くかかわっている19**なと、ナチス・ドイツとフランスのことについて講義で言及していて、改めて思いました。

15 テキストには、ベルリンでユダヤ人を隠して住まわせた人物が、紹介されていますね。 その人の話をテキストに従って読んでも、「明確な理由」は示されていません。不思議です。 杉原千畝やシンドラーにはかなり明確な理由付けがあったかと思います。調べてみるに値 する歴史的事実ですね。しかし、このような「無名」の人々のユダヤ人救済・支援は、歴 史的史料に残ることは極めてまれなのでしょう。ベルリンのユダヤ人の生存を助けた人の 話は、本にもなっています。

16 ショル兄妹は、暗殺計画は持っていませんでした。彼らは、ナチスが行う戦争の非道を 暴く文書を作成し、ナチス国家に従う人々を覚醒させようとしたわけです。

17 共感します。しかし、「<u>そういった状況下に陥っても」ということではなく、そうした「状</u>況下に陥らない」ために、現在の可能な行動は何であるのか、これを考えることが切実な問題ではないでしょうか。そのためにこそ、ナチスの時期の諸問題の研究が、現代の問題を深く批判的に思考させ、意味があるのではないでしょうか。

18 ヒトラーは、「ユダヤ人移送」、各地域からのユダヤ人の排除。東方への移送を、「ヨーロッパのため」と言っていました。たとえば、ヒトラーの 1942 年 1 月 30 日の国会演説がそうですし、有名な 1939 年 1 月 30 日の国会演説(テキストの当たって正確な文章を再確認してください)も、「ヨーロッパのため」、「ヨーロッパのユダヤ人の絶滅」と。1939 年当時の演説は、「今度世界戦争をユダヤ人が引き起こしたら、(第一次世界大戦の時のように)ユダヤの勝利・ボルシェヴィキの勝利ではなくて、ユダヤ人の絶滅だ」と。ヨーロッパ全域のユダヤ人がターゲットとなるのは、ヒトラーの必然的な論理でした。

19 まさにその通りですね。ナショナリズム、国民の一体感を作り出すためには、言語・国語が非常に重要になります。その国語の時間に、どのような内容のことが語られているか、これが重要です。国語を通じて、どのような歴史が描かれているか、之も重要です。ですから、教科書問題は、非常に重要なのです。どのような内容のことが教えられ、どのようなことが隠されているか、この検証こそ重要です。

ドイツとフランスは、両国の歴史家が協力して共通教科書を作っています。EUでもそうですね。お互いの国を悪く一方的に断罪するような教科書ではなく、相互の立場を理解しえあるような教科書を作っていくことも、重要になります。日本でも、中国や韓国と協力して教科書を作る運動と成果があります。どのような多国間協力の教科書が、どのような背景です作られる容易になったのかなども、調べてみるべきいいテーマですね。